東日本大震災でのボランティア活動

谷口綾菜

私は4月29日～5月9日の間、学生団体 youth for 3.11 と NPO 団体 NICCO の共同プログラムで、宮城県気仙沼市でのボランティア活動に参加しました。震災後から、何か自分にできることはないのだろうかと考えており、インターネットで見つけた youth for の「学生だからできること」という言葉を見てボランティア活動に参加することを決めました。気仙沼市に到着し、震災後、1ヶ月半経過したにもかかわらず、まだまだ復興が進んでいないことに驚きました。映画のワンシーンや、どこか遠い外国で起きている事ではなく、日本国内で起きている事なんだと実感しました。自然と涙が出てくる光景でした。

私達の団体は、総勢 26 人で、炊き出し班と作業班に分かれて活動し、私は作業班でした。小・中学校の田んぼの復興や、民宿の片づけ、アパートのヘドロ出し、側溝掃除などを行いました。田んぼの復興では、地元の中学生たちと話をする機会がありました。「私の家、流されたんだー」と笑いながら言っている子がいて、なんとも言い難い気持ちになりました。笑ってはいるけど、どこか寂しそうな、空元気という印象を受けました。一方で、作業を手伝ってくれたり、部活に一生懸命励んで、元の生活に戻ろうとしている中学生たちの光景を見て人間そんなに弱くないな、とも思いました。全国から集まった二十歳そこそこの学生たちは、彼らにとって、興味の対象であり、ボランティアの大人たちよりも気軽に話しかけやすい存在であったように感じ、そのことは「学生だからできること」に当てはまっていたらいいなと思いました。

作業 3 日目、それまで作業していた地域よりも被害が大きい地域で民家の片づけなどの作業を行うことになりました。その地域は、まだ隣で自衛隊が機械を使ってがれきの撤去作業をしているような地域でした。これまでの作業の疲れや精神的なもので作業開始から 30 分ほどで私はダウンしてしまい、そのまま宿舎に帰ることになりました。ボランティアに来ているのに、自分が仲間やスタッフの方たちに迷惑をかけてしまったことへの罪悪感、自分で自分の体調管理ができていないことへの情けなさ、自分はいったい東北に何をしに来たのかがわからなくなり、その日は一日中涙が止まりませんでした。しかし母からの電話や、友達からのメールで、次の日から、自分が出来ることを出来る範囲で全力でしよう!という気持ちになることができました。側溝掃除はそれまでで一番の重労働でした。近くに 2 本の川が流れている住宅街の側溝掃除でした。側溝にはヘドロがたまっており、家屋が倒壊して津波で運ばれてきたと思われる木材や、ブロック、瓦、衣類、アルバム、腐った食品、海から運ばれてきたホタテ漁の網、サンマ、一番驚いたのは鮭がまるまる 1 本などもありました。鼻がもげるような臭いは今でも鮮明に思い出すことができます。そこで私が思ったことは、明らかなマンパワー不足であること。10 人で丸一日かけて作業をしたにもかかわらず、進んだのは 20 メートル程度。住宅街であるために、自分たちで家屋の清掃をしている方達に、うちの前はいつ掃除してくれるの?と聞かれても、なんとも答えられず、表現しがたい感情になりました。

このボランティア活動を通して、メディアで知る東北の現状と実際に東北に行って私自身が感じた東北の現状にはギャップがあるように感じました。GW はボランティアが殺到する、というような報道がありましたが、実際ボランティア活動を行っている最中に会ったボランティア団体は 2 団体だけで、側溝掃除でもわかったように、まだまだ人手は必要であると感じました。人手はどれだけあっても余るこ

とはなく、やるべきことは山程あると思います。あまり多くのボランティアが被災地に殺到すると迷惑だという情報もあり、行くことをためらってしまっている人もいるかもしれません。自分の生活に責任を持って、被災地に負担をかけないようにするべきではあります。また、ボランティアそのものを偽善だと考える人もいるかもしれません。しかし、東北の復興には、偽善でもなんでもそのマンパワーが必要です。もし、自分が行っても何もできないのではないかと考えている人がいるならば、ぜひ現地に行ってほしいと思います。やらない善より、やる偽善。と今回のプログラムのメンバーは言っていました。本当にその通りだと思いました。

東北の復興には、まだまだたくさんの人の力と時間がかかります。私自身、体調を崩してしまい、不完全燃焼であるので、これをネガティブにとらえるのではなく、またボランティアに参加したいと考えるようになりました。東北で泥だらけになりながらボランティア活動をしていた生活と、三重県でなにも壊れておらず、ヘドロの臭いもしない平和な生活とのギャップに違和感がまだあります。三重県に帰ってきたばかりのころは、そのギャップが大きすぎて、何もする気になれませんでした。しかし、1週間が経過し、現地に行った私が今すぐに出来ることは、情報を発信していくことだと思うようになりました。微力ではありますが、この文章から少しでも支援の輪が広がっていけば幸いです。